「1・17」ボランティアの目で見た東日本大震災

―阪神・淡路大震災の経験をもとに

高橋 守雄
（社福）兵庫県社会福祉協議会
ひょうごボランタリープラザ所長代理

【たかはし もりお】昭和23年、兵庫県神河町生まれ。兵庫県警から昭和57年に兵庫県庁に出向、青少年局、知事秘書広報課に在籍。阪神・淡路大震災では、県災害対策本部で報道機関の対応などを担当。平成17年4月から現職、退職後も継続し、東日本大震災では「東北道・ボランティア・インフォメーションセンター」のセンター長を務めた。

阪神・淡路大震災後に創設された「ひょうごボランタリープラザ」とは…

「ひょうごボランタリープラザ」は平成7年1月17日に発生した「阪神・淡路大震災」を機に、大きく広がったボランティア、市民活動をはじめとする県民ボランタリー活動の支援拠点として兵庫県が設置し、平成14年6月にオープンしました。

NPOや地域団体、公共・民間の支援機関の交流やネットワーク構築を促進するほか、情報の提供、相談、人材育成及び調査研究を進めるとともに「ひょうごボランタリー基金」を活用し、多様な活動に対する助成や貸付事業を一体的に展開し、質の高い支援を行っています。

国内で発生した災害に際しては、兵庫県内からボランティアを募って被災地に迅速に派遣していく、ボランティア派遣拠点としての機能も有しています。

兵庫県が設置して兵庫県社会福祉協議会が運営する、全国でも珍しい、いわゆる公設民営型の兵庫県のボランティアセンターと言っても過言ではないでしょう。職員数は21名で兵庫県職員、兵庫県社会福祉協議会職員と嘱託職員で構成しています。

阪神・淡路大震災から10年目にあたる平成17年の1月17日には天皇・皇后両陛下の行幸啓を賜り、NPOやボランティアの人たちに励ましの言葉をいただきました。

私がこの「ひょうごボランタリープラザ」の所長代理に着任したのは平成17年4月、県職員としては最後の職場となりましたが、県を退職してからも引き続き、OBとして当プラザで勤務させていただいています。

阪神・淡路大震災当時

阪神・淡路大震災では、自宅は幸いにも一部損壊で大きな被害は免れていましたので、発災直後に家族の運転する車で県庁にいち早く駆けつけました。途中、高台から見た長田区方面から立ちのぼる、いく筋もの火災の煙、倒壊した数え切れない家屋を見て「これは大変な災害になる」と背筋が凍るような思いがしたことを昨日のように思い出します。

それからの1ヶ月間は、兵庫県災害対策本部の広報担当を任され、ほとんど自宅に帰ることができず、日々、被災者情報の収集と報道機関への発表、当時の貝原俊民知事の記者会見対応等に追われていました。

3月19日井戸知事（写真中央）の被災者へのお見舞い（左から2人目・西村副町長、3人目・三浦宮城県副知事）

神戸でも大きく揺れた 東日本大震災 未曾有の大災害になろうとは…

昨年3月11日の東日本大震災の発生時には震源地から約1000キロ離れた神戸の地でも大きな揺れを感じ、高層ビルの6階にある当プラザも長い時間揺れ続けました。この時、阪神・淡路大震災を超える未曾有の災害で被害がきっと膨れ上がるだろうと予想されましたので、被災者の心情を思うと「一刻も早く被災地に入り、阪神淡路の経験を、恩返しを」と焦る気持ちを抑えることができませんでした。

兵庫県の災害対策本部もすぐに立ち上がり、私もボランティア担当として加わってボランティア派遣の準備に取り掛かりました。

被災地との連絡も、行政が混乱している中ではマスコミの情報に頼るしかありません。しかし、いち早く被災地に入り支援の手を差し伸べるのが、阪神・淡路大震災で多くの人たちに助けていただいた、兵庫県や神戸市の使命でした。

被災地の被害拡大の様子はニュースで分かってきていましたが、被災地に救援に入るルートや手段を見つけるのは困難を極めていました。だからと言って、いつまでも茫然と見ているわけにはいきませんでした。

阪神・淡路大震災時の恩返しを！ 今こそ被災地に先遣隊を

地震発生の1週間後の3月18日の夕刻に兵庫県のボランティア先遣隊を大型バスで出発させる計画を立て、着々とボランティアの確保や緊急支援物資の調達準備に入りました。

高速道路はガソリンの供給が悪いなりにもボランティアバスや救援物資を運ぶ救援車両の通行は優先して許可していました。当初の計画通りに3月18日の夕刻に、井戸敏三兵庫県知事を先頭に県職員や医師団、看護師、ボランティア先遣隊など約80名がバスに分乗して、名神、北陸、新潟から磐越、東北道と高速道路を乗り継ぎ15時間かけて最初の被災地・宮城県の松島町に入りました。

最初の支援場所は宮城県松島町に なぜ、松島町に…

日本三景の一つ、松島を有する松島町。湾内の多くの小島が津波の防波堤の役割を果たしたお陰で、比較的津波の被害も少ない状況でした。混乱する被災各県や被災市町村の中で唯一連絡がつき、支援要請があったのがこの松島町で、当時の西村晃一副町長（現・宮城県教育庁生涯学習課長）を窓口として支援を受けていただくことになりました。

3月19日の早朝に被災地に入りましたが、松島町民の多くと、隣接する東松島市の被災者が避難されて来られた日と重なった上、体調の悪い方も多かったのですが、兵庫からの医師団や看護師で診察や健康相談にのるなど、タイムリーな救援活動ができました。

関西広域連合（近畿地方の府県で構成しており、兵庫県の井戸知事が連合長）が取り入れた東日本大震災被災地支援のカウンターパート方式で、宮城県への支援活動に足掛かりをつけていただいたのが松島町でした。

3月とはいえまだ寒さ厳しい東北の被災地。私が被災地に入って最初に目に焼きついたのは、ガソリンを求めて数珠つなぎとなった車の列と、灯油を求めて長蛇の列を成す人々の光景でした。

被災地の人々がガソリンや灯油を求めて早朝から長時間並んでおられる光景をバスの中から見ていると、「バスに燃料を使うくらいなら被災地に回せ！」と叫び声が飛んで来そうで、申し訳ない気持ちになり心が張り裂けそうでした。

最初に入った避難所は被災して1週間後だったにもかかわらず、1日に提供される食事は冷たいおむすびが2個程度。まだボランティアが宿泊する場所もありませんでした。自己完結が基本のボランティアとしては、その日の夜に神戸に向けてUターンすることになりました。余震が続き悲鳴が響

3月24日の松島町における
炊き出し

き渡る中で、やむを得ない決断でした。

その別れ際に、被災者から「温かいものが欲しい！」と悲痛な声を聞いて、私の脳裏に蘇ったのは、阪神・淡路大震災で被災した1月の寒さ。東日本大震災の被災者の方と「今度来る時は、温かい食べ物の炊き出しに来ますからね」と固い約束を交わしました。

厳冬の被災地に温もりを…すぐに引き返し「炊き出し」に

3月20日早朝に神戸に帰ってからすぐ、次の「炊き出し隊」の準備に入りました。3月23日にはボランティアバス3台に、炊き出し用の食材や機材、水を載せたトラック1台を加えて被災地に向けて出発するという、0泊3日の「弾丸ツアー」を決行。翌24日には松島町の避難所で、おでんやカレー、豚汁といった温かい食事を提供して、多くの被災者に喜んでいただくことができました。

プロ野球・楽天の球団選手会からも支援の手が…

この炊き出しには、プロ野球の「東北楽天ゴールデンイーグルス選手会」の皆さんから食材購入資金の支援をいただくと共に、出発時には食材のトラックへの積み込み作業も手伝っていただきました。

楽天球団は震災直後、本拠地の仙台の球場が使用できず、関西に滞在して甲子園や神戸の球場で練習を積み重ねていました。そんな中、選手の皆さんは「東北に帰って被災者支援をしたい」思いと、帰れない「もどかしさ」で、遠い神戸から支援の手を差し伸べる方策はないものかと模索されていました。その時「ひょうごボランタリープラザ」の被災地での炊き出しやボランティア活動の記事を新聞で知って、当プラザに申し出があり実現しました。

東北楽天ゴールデンイーグルス選手会からは引き続き支援をいただいており、夏場のボランティア活動の暑さ対策としてボランティアの皆さんに楽天カラーの帽子も提供していただきました。

被災地にボランティアが足りない！

3月23日、二度目の被災地に入るバスの中で、私は阪神・淡路大震災当時のボランティアのことを思い出していました。平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災では、国内外から多くの義援金や救援物資と共に多くのボランティアが駆けつけてくれました。

兵庫県は日本列島のほぼ真ん中に位置していますので、ボランティアがいち早く東西の方向から被災地に入り、その人数は発生1ヶ月で約60万人に達しました（兵庫県調査から）。

阪神・淡路大震災では新幹線も高速道路も一部区間を除き、またJRや阪急電車、阪神電車も比較的早く復旧したこともあり、急激にボランティアの数が膨れ上がりました。

しかし、東日本大震災では私たちが被災地に入った発災1週間後で、ボランティアの数は1万1000人（全国社会福祉協議会資料から）で、発災後1ヶ月経っても11万7000人（全国社会福祉協議会資料から）と阪神・淡路大震災に比べて5分の1程度と極端に少ないボランティアの数でした。

そんな折、ボランティア不足のニュースを各マスコミが報じるようになりました。その影響で、徐々にボランティアの数も増えてきて、4月後半から始まったゴールデンウィーク期間中は一気に多くのボランティアが被災地に入ることが予想されました。

ちょうど震災1ヶ月が過ぎた頃には燃油の供給も安定しつつあり、高速道路も一般車両の通行ができるまで復旧していましたが、新幹線はまだ仙台までは開通していませんでした。

阪神・淡路大震災、ボランティア元年の教訓から生まれた「インフォメーションセンター」構想

この時、私の脳裏に浮かんだのは、阪神・

東北楽天ゴールデンイーグルス
選手会会長のあいさつ（３月23日）

淡路大震災の時に学んだ教訓でした。

阪神・淡路大震災当時は、現在のように発生後すぐ各市町に災害ボランティアセンターを立ち上げて、被災者のニーズ調査をして、ボランティアを適切に被災地に誘導するといったスタイルやマニュアルは完全に確立されておらず、特定の箇所にボランティアが集中し、被災地が混乱した時期もありました。

その後、「ボランティア元年」と言われた阪神・淡路大震災のボランティア活動の検証・検討の中で、「被災地に近い地域でボランティアを事前振り分けし、被災地情報や道路情報などを提供して被災地にスムーズに誘導・案内を行う等の機能を持たせた拠点を、被災していない関係機関で設置すべき」との提案がありました。

その提案を今こそ、阪神・淡路大震災でお世話になった兵庫県が具現化しなければならないと、井戸兵庫県知事に「ボランティア・インフォメーションセンター」の提案をしたところ「それはいいアイデアだ！　すぐに具体化を！」との力強い後押しを受けて、私たちは各方面との調整に入りました。

「東北自動車道・ボランティア・インフォメーションセンター」の誕生

当初はＪＲ仙台駅に「ボランティア・インフォメーションセンター」の設置を考えました。しかし、新幹線が未開通でしたので、東北自動車道に的を絞り、被災県であり東北地方の要である宮城県や宮城県社会福祉協議会に設置の提案を行いました。

「センターの運営や設置経費は全て兵庫県と〝ひょうごボランタリープラザ〟で行います」と説明し、紆余曲折はありましたが、快く了解を得ることができました。東北自動車道を管理するＮＥＸＣＯ東日本には場所の提供などの支援をいただき、ゴールデンウィーク前の４月20日、東北自動車道旧泉本線料金所跡地に「東北自動車道・ボランティア・インフォメーションセンター」を開設する運びとなりました。

私がセンター長となり、５月15日までの開設期間中は地元宮城のボランティアと兵庫県からのボランティアが毎日入れ替わりながら20名のスタッフで運営してきました。

このインフォメーションセンターでは毎日２回、被災各地の災害ボランティアセンターから最新のボランティア受け入れ情報や作業内容などを電話で聞き取り、ボランティア希望者に提供しました。また、私たちが独自で入手した道路情報や宿泊情報などに被災地の災害ボランティアセンターの地図を付け加えて、訪れる全国からのボランティアにプリントアウトして配布しました。

このインフォメーションセンターでの模様はＮＨＫで全国に生放送されたほか、民放各局や新聞紙上でも全国に報道されました。その結果、ゴールデンウィークを挟み東京方面や名古屋方面を含め全国の多くのボランティアに利用されました。

開設期間中には政府（内閣府）から当時のボランティア担当補佐官や内閣参事官が激励訪問に来られたほか、全国の自治体の防災担当者をはじめ災害関連団体など多くの来訪者がありました。

５月にこのボランティア・インフォメーションセンターを閉所して以降、被災各地のボランティア受け入れ状況の情報提供は、引き続きひょうごボランタリープラザ内に

東北自動車道ボランティアインフォメーションセンターの外観

石巻市内の小学校庭の
側溝の泥出し

「東日本大震災・ボランティア・インフォメーションセンター・兵庫」を設けて、1週間に1回、最新情報に更新してネット上で全国に発信をしています。

その後、被災各地の災害ボランティアセンターの支援体制も順次整い、被災地に入ったボランティアの数は約29万2000人と膨れ上がりました。夏休みや冬休みを中心に、東日本大震災の発生後1年間のボランティアの活動者数は約100万人を超える見込みとなりました。

阪神・淡路大震災では1年間に約140万人ですから、被害の大きさからして、これからも被災地東北には継続してボランティア活動に入る呼びかけが必要だと思われます。

災害時に新幹線・飛行機にボランティア割引制度の導入を…

阪神・淡路大震災時と今回の東日本大震災で、ボランティア活動の面から見た大きな相違点はボランティアの人数が今回の震災では少ないことです。東日本大震災は被災地が東北であり、西日本や九州など遠方からは自費参加が困難であったと思われます。内閣府のボランティア担当補佐官に、夏休み期間中だけでも新幹線や飛行機のボランティア割引制度を創設してほしいと強く訴えましたが、実現はしませんでした。

一方、新しい動きで言いますと、ボランティアの活動に企業から参加される人が増えたことが挙げられます。これは各企業がボランティア休暇の導入や社会貢献活動、CSR活動への理解を深めたことを表していると思います。

また、阪神・淡路大震災ではほとんど見られなかったNPOやNGOなどの独自の活動に加え、相互のネットワークを活用した支援活動と活躍が目立ちました。兵庫県から参加したボランティアの特徴としては学生の夏休み、春休みを利用した学校単位での参加が目立ったことでしょう。

17年前に全国からのボランティアによって救われた阪神・淡路大震災の被災者が恩返しの気持ちで被災地に入られたのか、50代60代のボランティアが増えたことも今回の特徴として挙げられます。

これからのボランティアに求められるものは

「ひょうごボランタリープラザ」では、これまでに兵庫県内から東北の被災地に大型バス100台で約3000人のボランティアを派遣してきました。

ボランティアの活動内容も当初は泥出し、廃材やがれき処理、家具搬出が主な作業内容でしたが、被災地の落ち着きと共に、学校再開に向けての校内の美化作業や農家の苗の植え付け作業のお手伝い、仮設住宅への引越しの手伝い、思い出写真の洗浄、仮設住宅での傾聴ボランティアや伝統行事などのイベント支援のボランティア、兵庫県内に避難されておられる方々を対象にした里帰りボランティアバス等とボランティア活動の内容が変化してきましたが、重要な点は「今後も継続して派遣すること」です。

私も数え切れないほど被災地に入っていますが、季節が変わり、時が進むにつれて被災者のニーズは変わり、ボランティアの活動内容も変わってきます。それを受け止め、一日も早い被災地の自立を目指すためには柔軟で息の長い支援体制の維持継続が最重要課題になるでしょう。

東日本大震災の発生から1年が過ぎましたが、被災者や被災地の復旧と復興はこれからです。阪神・淡路大震災でも辛い苦しい期間が長く続きました。お世話になった兵庫ならではの支援活動を被災地東北のために引き続き行っていきます。